

## 環境政策・計画学科のいま・むかし

平山 奈央子  
環境政策・計画学科

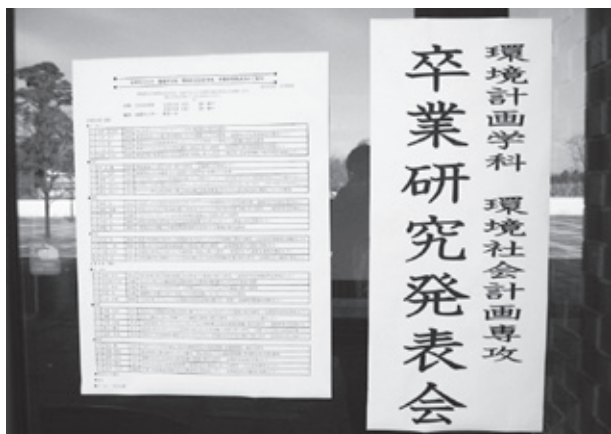
私は、2001年から2010年までの10年間で学生として、2013年10月から教員として、改めて数えると12年間と少し、ここ滋賀県立大学とお付き合いしていることになる。時々、「私の学生の頃はどうか」とか「昔と今の県大生が違うかどうか」と尋ねられることがある。学生と教員は立ち位置が違うのでどうお応えしてよいのかわからず困っている、ということにしているが、そもそもあまりよく覚えていないのが正直なところである。今回の特集記事の執筆にあたり、ほとんど忘れかけていた昔の記憶を引っ張り出し、今と違う点を思い起こしてみたのでいくつか紹介したい。記憶を呼び起こすために、単純ではあるが私の身近な環境政策・計画学科に関わる〔昔あって今ないもの〕と〔今あって昔なかったもの〕を探してみた。

〔昔あって今ないもの〕としてはじめに思いついたのは、学科名が変更され「環境計画学科環境社会計画専攻」という名前がなくなったことである。環境政策・計画学科は私が学生のころは学科として独立しておらず、環境計画学科の中で社会計画と建築の2つの専攻に分かれていた。愛称として「社計(しゃけい)」と呼ばれていて、私の1つ上の代の先輩たち(6期生)は、黒いTシャツにでかでかと(鮭)と書かれた「しゃけT」を着ていたのを覚えている。私が教員として着任した時にはすでに名前が変わっていて、学科名の中にどこにも「社会」が入っていないので「しゃけい」とは呼べず、長い学科名なのに今だに良い略し方が定まらない。同じように感じているのか、今も「社計」と呼んでいる方も多いのではない様に

思う。たかが名前、されど名前、実態として継続していることには変わらないが、卒業生としては少しさみしいものがある。時間が経って、今の学科名もそのうち馴染んでくるのだと思う。

次に、B1棟とB2棟の間の2階のお手洗いの前に灰皿があったのがなくなった。学内・建物内に他にもぼつぼつとあったのではないだろうか。私はたばこを好きではないが、歩いていて廊下に誰かがいてたわいもない話をしている、そこにそろりと加わり、そろりと出る、という緩やかなコミュニケーションの場があった。個人的に、「灰皿」は昔でいう井戸端会議の「井戸」だと思っている。吸っていたのは主に教員と男子学生だったが、気軽にあいさつや簡単な情報交換をする場として、お互い元気を確認する場としては良かったのではないかと思っている。今は校内全面禁煙になったことと、そもそも喫煙する学生が少なくなったように思うのでそういうシーンは見られない。

〔昔あって今ないもの〕の最後として紹介したい事として、私の指導教員である井手先生の角(ツノ)がなくなった。私は「あ、ツノがない」と思った瞬間を今でも覚えている。私がゼミ配属されたのは2004年度であったが、ある時点までの井手先生は大変厳しく、ゼミが夜7時まで続くこともしばしば、毎年何人か涙を流し、へこみ、苦しいことも多い研究生生活であった。もちろんその中で得るものは多かったしゼミ生活全体としては楽しいことも多かったので後悔しているわけではない。ただ、そんな井手先生の様子が少し変わってきた。2006年度のゼミ生は5人全員が女子学生だった。ゼミ室で1人の学生が卒業研究の中間発表のパワーポイントを先生の指導で修正していた時のことである。「どう修正したらいいのかわかりません。」と女子学生、次の瞬間、「どれか試してみよう」とその学生が修正していたパワーポイントに先生が直接手を加えたのは、声には出さなかったが衝撃的だった。ツノはどこにいった。そこは「自分で考える」ではないのか…。もちろん、先生が特定の誰かを甘やかしていたわけでも、学生が色目を使っていたわけでもないことを、誤解ないように申し添える。今となっては、女子学生ばかりの学年で先生もどれくらい厳しく指導してよいものか、少し手探りだったのかもしれないと想像する。先に「ツノがなくなった」と書いたが、「小さくなった」の方



環境計画学科環境社会計画専攻が確かにあったしるし

が正しいかもしれない。もちろん、今も厳しく、卒論の発表会では以前ほどではないがきびしいコメントをされている。コメント以上に、発表中に一番前の席でカチカチ鳴らすペンの音こそが学生にプレッシャーを与えるのだが、気づいてか気づかずかそれも変わらない。なので、「今あなたたちが見ている井手先生のツノは昔に比べるとだいぶ小さいですよ」と学生達にお伝えしたい。

話は変わって、〔今あって昔なかったもの〕を探してみた。まず、昔は(学生の視点ではあるが)学科の広報戦略にそんなに力を入れていなかったのではないかと思う。オープンキャンパスは昔からあったと思うが、関わった覚えはほとんどない。今は、学科の卒業生が広告業界やデザイナー、カメラマンとして働いており、「答えを探すな、問題を探せ」という挑戦的なキャッチコピーを生み出し、HPを華やかにし、先生方の写真を見栄え良く撮り、学科の広報に力を貸してくれる。学科の素敵なパンフレットやグッズまでできた。また、オープンキャンパスでは、学科カラーの菜の花色で会場を彩り、在学生在が学科の紹介をしたり高校生の相談にのったりしている。社会全体が少子化であることと入試倍率も気になり、いかに学科のオリジナリティをアピールするか、ということに教員・学生・卒業生が力を合わせて取り組んでいる。



オープンキャンパスで在学生在が高校生の相談にのる様子

また、小野奈々先生や私のように女性教員もいなかった(正確には一時期在職されていたと聞くがほとんどの学生はお目にかかっている)。いないときは学生としてあまり気にならなかったし、これといって困ることもなかったが、やはり学生にとっても職場としても関わる人が多様である方がいいと感じている。私は、今年初めてゼミ生を持ったが、卒業後は学生と歳の離れた友達のような関係でありたいと思っている。特に、女性は歳を重ねることでライフ

スタイルが変わることも多く、それに伴って大事なものの、優先順位も変化する。そんなときに気軽に話を聞いてもらう存在が一人でも多いことは私にとっても学生にとっても助かるのではないかと思っている。

私は博士課程を修了してから教員になるまでの約2年間を別の大学で過ごした。帰って来て改めて、変わらなく親しみを感じたのは、環濠ののどかな風景とスクッとそびえ立つえんぴつ塔、また、湖岸道路から大学に入ってくる道路の脇に続く、外側の桜と内側の紅葉の風景である。特にえんぴつ塔を見ると意外にもいろいろな風景とともに、その時々々の状況を思い出す。学生の頃に徹夜して朝日が昇るときに見た風景、教員になってからも今だに時々徹夜をして同じように朝日とえんぴつ塔を見るときにたまたまその当時を思い出す。また、教員になってから満月の夜に月とえんぴつ塔を見ながら学生と団子を食べた事や飛行機雲とえんぴつ塔、雪の日のスロープに積もる雪とえんぴつ塔も懐かしい。こんなにたくさん「えんぴつ」と文章の中で書いたことはこれが初めてであるが、改めて私の生活がこの大学とともに歩んできたのだと感じさせられる。これから、大学は、私は、どう変わっていくのか。少しドキドキしながら、県大を拠点に気持ちを新たに次のステージに進みたい。



桜とえんぴつ塔